研究調査報告

# 青島の建築視察報告

内田　青藏
（非文字資料研究センター　研究員）

## はじめに

今回の訪問の目的は、非文字資料研究センターの研究班である東アジア開港場（租界・居留地）における日本人の諸活動と産業研究班（通称租界・居留地班）の一人として青島のかつての租界地とその後の都市の発展の様子の視察と、青島海洋大学と租界地として発展した青島についての共同研究などの学術交流を今後行うための表敬訪問であった。

筆者にとっては初めての青島訪問だったこともあり、街歩きをしながらの青島の建築遺構の視察を楽しみにしていた。また、偶然にも筆者の研究室に青島出身の大学院生李蓁さんが在籍し、青島の近代史を銀行建築のデザインを通して考察するという研究テーマを抱えていたこともあり、視察の合間に李さんと現地で落ち合い、主要な銀行建築の視察も行った。私的な研究目的でもあるが、青島の歴史を振り返ると、経済界の発展を支えた銀行建築の存在は全く無関係のものではなく、むしろ青島の歴史を今に伝える歴史的建造物でもあり、貴重な体験であった。

## 青島の近代建築について

### 1　青島の都市計画

青島の建築に触れる前に、青島の近代の歴史について簡単に触れておきたい。青島の近代化は、諸外国の支配下の中で進められ、その過程は支配者側からみるとドイツ時代（1898-1914 年）、第 1 次日本時代（1914-1922 年）、北洋政府時代（1922-1929 年）、南京政府時代（1929-1937 年）、第 2 次日本時代（1937-1945 年）の 5 期に時代区分できる。ただ、現在の青島の都市の骨格や建築の基礎は、最初のドイツ時代で造られたものであった。

アヘン戦争後の 1842 年に締結された南京条約により開港した広州、厦門、福州、寧波、そして上海の 5 港を通し、欧米列国の積極的な中国進出が始まった。ドイツは 1897 年のドイツ人宣教師殺害事件を機に艦隊を派遣し、膠州湾（こうしゅうわん）一帯を占領し、1898 年清政府との交渉で膠州湾一帯の 99 年間の租借権を獲得し、積極的な中国進出を展開することになる。また、この地域の地名に関しては、1899 年にドイツのヴィルヘルム二世の発案で、湾に浮かぶ小島の名称をそのまま都市の名称として使用することとし、「Tsing-tau」と発音することとなったという[1)]。

租借権を得た後、ドイツは山東地方の幹線道路と鉄道の敷設権および鉱山の採掘権を得て、都市整備を展開した。以下、徐飛鵬・堀口正昭による都市整備の概説をもとに紹介しておきたい[2)]。

租借当時は、信号山の南に広がる平地に中国人の集落があった。そこでドイツ人は、信号山の西側に位置する観象山の麓を新しい街づくりの起点として、広場を備えた総督府を設け、ここから青島湾に向かって南下する道路を中心軸とし、西側を商工業用地、東側を兵営および別荘地区とするという基本方針を定めたという（図 1）。

信号山の東側と南側は兵営の建設、兵営のさらに南側には別荘用地とし、その一画に総督官邸、また、総督府と中国人集落の間の台地には教会堂と周辺の公園としての整備をめざした。

駅舎は、中山路の西側で、鉄道は膠州湾に沿って北上する。鉄道に沿って工場と倉庫からなる工場地帯が形成され、また、観象山の北側と中山路の間には港湾ならびに工場労働者としての中国人街の建設が計画されたのである。現在の青島の都市は、このドイツ時代の計画に基づいて発展したものであり、また、建築もこの時代のものが多く現存している。

### 2　青島の建築視察

表敬訪問の合間の視察のため、専門とする建築遺構を計画的に視察した訳ではない。それでも、いくつかの興味深い建築を見ることができた。ここでは、日程に合わせて視察した建築について、その概要を簡単に報告したい。

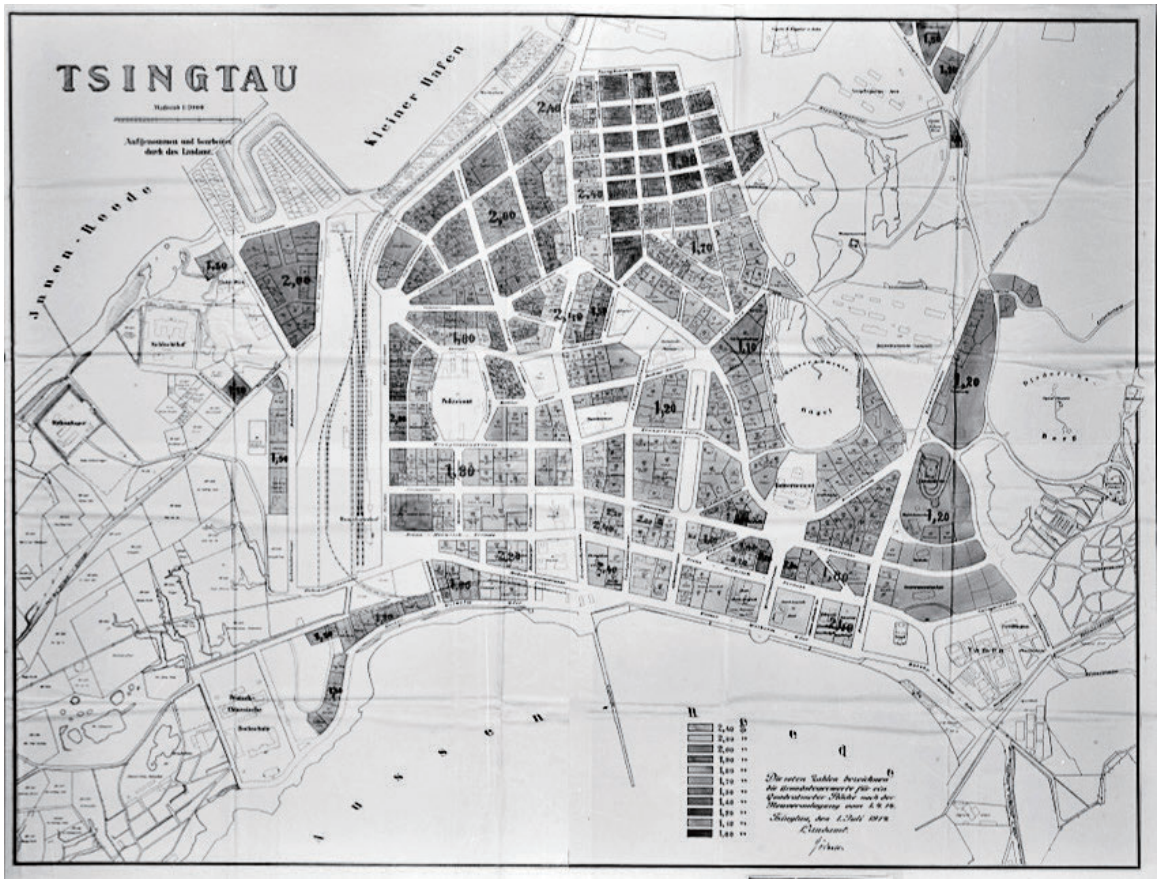



図1　青島都市計画図　1914 年　（『見証青島』青島市檔案館　2010 年より）

写真1　旧ドイツ銀行青島支店

初日、良友書店として再利用されている旧膠澳（こうおう）ドイツ帝国郵便局（1901 年）をのぞいて、青島関連文献書籍を確認し、その後、旧徳華銀行青島支店を視察した。

この旧徳華銀行青島支店（Deutsch-Asiatische Bank）、すなわち旧ドイツ銀行青島支店は、1898 年にドイツ政府の指示により本国の 13 銀行の連合により造られたもので、ドイツの中国進出を経済的に支えた銀行建築であり、当時のドイツ人の建設した建築群の中でも重要な役割を担ったものといえる。竣工年は、1901 年、設計者はヒルデブラントとヴァィラーである。建設地は、青島湾に面したバンドである太平路に沿って内側に作られた準メインストリートである広西路に面している。地下 1 階、地上 2 階建て、左右対称のファサードで、様式はネオ・ルネサンス様式を基調としている。屋根はマンサード屋根で、外壁にはコーナーストーン、アーチは迫石と要石を装飾風に扱うなど、材料としての石の存在を強調したデザインといえる。ネオ・ルネサンス様式を基調とした左右対称の構成は、銀行建築としての威厳性を求めたものと思われる。一方、2 階のアーチ形開口部は、当初は建具がなく、コロニアル様式の特徴と共通する開放的なベランダであったと思われ、コロニアル様式の要素を取り入れたものといえる。また、石を強調したデザインは、この青島は石の生産地として知られ、地元の産物としての石を強調したものと思われる。

1914 年に日本が占領すると、この建物は転用され、日本陸軍青島守備司令部、民政部、その後は日本領事館、戦後は前海餐館、住宅へと転用に転用を重ねて現在に至っている[3)]。日本と関係の深い建物の 1 つでもある。

写真2　旧海浜旅館

2日目は、旧海浜旅館(Strand Hotel)を視察した。建設地は、匯泉湾(かいせんわん)のバンドに面した一等地である。現在、この建物は整備され、青島城市建設集団という組織が管理し、1階部分は青島の歴史を伝える資料館として利用されている。この資料館の案内をしていただき、青島の近代史を概観した。

この建物の竣工は1904年で、設計者は不明である。レンガ造り3階建てで、中央部から両翼を伸ばし、海に面する正面側の両翼部分は3層のベランダが重なる左右対称の建物である。このベランダ部分は木造で、また、両翼部の屋根は木造による切妻屋根で、妻面および3階の壁面部分まではハーフチンバーとし、木造とレンガのコントラストをデザインとして表現している。中央部には、正面に2階建ての車寄せが付き、3階部分はバルコニーとするなど、中央玄関部らしい強調したデザインが施されている。

内部のインテリアも素晴らしく、中央玄関ホール奥には鋳鉄製の見事な階段があるなど、魅力的な建築の様子が見て取れる。

午後は、交通博物館ならびに銀行博物館を見学し、同じく青島の近代史関連の展示を案内していただいた。その後、街歩きを行い、日本人建築家の三井幸次郎設計で1925年竣工した旧青島証券取引所の外観を見学した。ちなみに、三井は1914年に工手学校（現工学院大学）を卒業後、中国工商有限公司に務めた後に独立して青島で事務所を構えていたという[4]。

現在、改修中で内部は残念ながら見学できなかった。ネオ・ルネサンス様式を基調とする典型的な歴史主義様式の建築で、規模も大きく迫力を感じさせる建築であった。その後、そのまま街歩きを行い、同じ三井幸次郎設計の旧朝鮮銀行青島支店（1930年）、セセッション風の旧英国青島銀行（1917年）、旧三菱洋行（1918年）、長野宇平治設計の旧横浜正金銀行青島支店（1919年）、旧三井物産株式会社青島支店（1930年）の外観を眺めた。

また、その後、青島の旧紡績工場の視察を行った。これは、非文字資料研究センター客員研究員の冨井正憲がすでに調査した広大第五廠（旧鐘紡）の社宅研究[5]があり、その対象となった社宅のその後の様子を知るためのものだった。社宅は基本的には取り壊されていたが、副社長および社長用の住宅2棟は現存していた。この2棟の建物は、1922年に日本人建築家である平野勇造の設計したもので、2年前の2017年12月の調査で傷んではいたもののその存在は確認されていた。今回の調査でも、現存が確認できた。内部には、畳敷きの部屋も用意されているなど日本人向けの住宅であったことがわかる。なお、平野はアメリカのカリフォルニア大学で建築を学び、1890年に帰国して事務所を開設するものの、1899年には三井物産に入社し、翌年の1900年に三井物産の建築技師として上海に渡り、1903年に三井物産上海支店、1911年には日本総領事館などを手掛け、1923年に帰国している[6]。この紡績工場や社宅は、帰

写真3　旧海浜旅館内部

写真4　旧青島証券取引所

国直前の仕事でもあったのである。

3日目は、青島ビール博物館を視察した。ここは中国で初めて造られたビール工場だ。創設は1903年で、歴史的建造物を見学用に再利用しており、当時の様子を知ることができた。

その後、再び市内中心部に戻り、青島天主教堂の視察を行った。1934年竣工の双塔形式の教会堂で、設計はアルフレッド・フレーベルである。平面形式は三廊型のバシリカ式で、構成上は、身廊部分が内部空間も天井が高く、側廊部は天井が低く、身廊上部の両側にはクリアストーリーが設けられている。そのため、外観上は身廊部分の中央部は2階建て、側廊部は平屋という構成である。その建物全体の中央部の外壁上部、および平屋部の外壁上部、さらには双塔の開口部上部にはロンバルディアアーチ風の装飾があるなど、ロマネスク様式を基調としていることがうかがえる。また、屋根には屋根窓があり、特にトランセプト部分の屋根には牛目窓が付くなどドイツ的なデザインも見ることができる興味深い教会建築といえる。

写真5　青島天主教堂

次に、教会堂の前には広場があり、そこから少し道路を下ると、1929年から1937年までの南京政府時代に当時の政府が新たな金融区の建設をめざして、公園だった敷地に6棟の銀行を建築したゾーンがあり、移動した。このゾーンの視察は今回青島来訪の目的のひとつでもあり、興味深く外観を中心とした視察を行った。個々の建築群に関しての考察は、院生の李さんと一緒に分析を行い、論文としてまとめる予定である。そのため、改めて、後日に別稿で詳細に報告したいと考えている。

最後に、中国海洋大学のキャンパスに移動し、キャンパス内の建築視察を行った。興味深かったのは、大学の教学部校舎として利用されていた旧日本人青島中学校だ

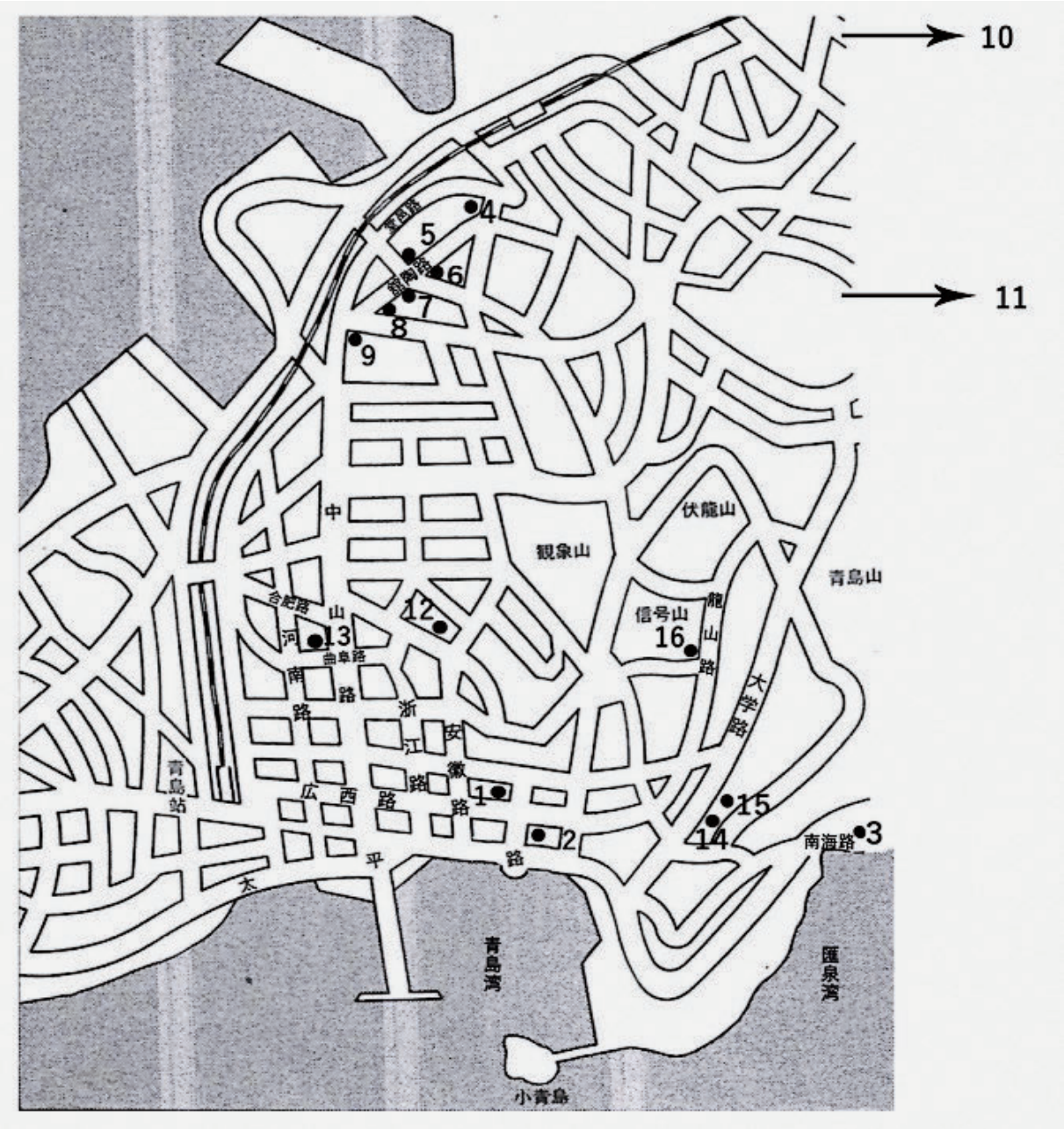
写真6　旧日本人青島中学校校舎

写真7　旧日本人青島中学校校舎正面の妻面

写真8　旧日本人青島中学校寄宿舎

った建物である。竣工は1920年で、設計者は第一次日本占領時代に活躍した日本人建築家の三上貞である。ちなみに日本建築学会機関誌『建築雑誌』の1922年発行の437号に日本人青島中学校正面の写真ならびに平面図が掲載されている。また、正員三上貞の作品として1920年竣工の青島病院本館および青島病院支那人治療分院も1921年発行の418号に紹介されている。三上の経歴は不明だが、青島で活躍していた日本人建築家の一人であった。

さて、改めて旧日本人青島中学校として建設された建




1、良友書店（旧膠澳ドイツ帝国郵便局、1901 年）
2、旧徳華銀行青島支店
3、旧海浜旅館
4、旧青島証券取引所
5、旧朝鮮銀行青島支店
6、滙豊銀行青島支店
7、三菱商事株式会社（1918 年）
8、旧横浜正金銀行青島支店
9、旧三井物産株式会社青島支店（1920 年）
10、旧鐘紡織工場青島工場及び社宅
11、青島ビール博物館
12、青島天主教堂
13、6 棟の銀行建築用地
14、旧日本人青島中学校校舎
15、旧日本人青島中学校寄宿舎
16、旧ドイツ総督官邸

図2　視察した建築の位置を表わした青島市区地図（作成　李　蘂）

物を見てみよう。正門側に旧校舎が、背後には旧寄宿舎が現存している。

旧校舎の玄関部の建築形態の輪郭は、緩やかな山形の曲線屋根による形状で、ほぼ同じ頃フランス・ベルギーで流行したアール・ヌーヴォー（新しい芸術）のドイツ版といわれるユーゲントシュテール（若い様式）と呼ばれるものといえる。また、玄関部の前に設けられた車寄せ部分は大きなアーチが見られ、壁面は波型の線状装飾があり、隅部のほぼ中央部にはコーナーストーンのように巨大な荒石が配され、まるで重い石が空中に浮かんで

写真9　旧ドイツ総督官邸

いるような不思議なデザインといえる。また、車寄せの屋根面では薄い荒石が庇のように飛び出ている。また、その背後の玄関部の山形の曲線屋根の妻面も最上部は荒い石貼りで、軒は車寄せと同様に庇は薄い荒石である。開口部の上部の庇も薄い荒石で、支えるブラケットも大きな荒石が用いられるなど、石の表現が際立っている。また、赤い瓦葺きの屋根にはドイツ風の牛目窓が連続して配されている。

旧寄宿舎も玄関部は唐破風のような緩やかな曲線の屋根となる。屋根の材料は、旧校舎と同様に薄い荒石葺きで、軒下には大きな荒石がコーナーストーンのように配され、その下の壁は小石貼りである。背後の２階建ての外壁は、旧校舎と同じく波型の線状装飾が施されている。屋根も同様で赤い瓦葺きの屋根にはドイツ風の牛目窓が配されている。

このように旧日本人青島中学校ならびに旧寄宿舎は、ドイツのユーゲントシュテールのデザインにドイツの伝統的な牛目窓付きの屋根を持ち、かつ、荒石を屋根の軒先や開口部の庇部分に用いるなど、本来ならば基礎部分などに用いるべき重い石を建築上部に配することにより、不安定で不思議な雰囲気を感じさせる建築を生み出している。こうしたデザインがどこから生まれたものか興味があるが、1907 年に完成した旧ドイツ総督官邸は、変化に富んだ形態で、荒々しい石の仕上げが随所に見られ、細部にはユーゲントシュテールの装飾からなる建築であることが知られている。今回視察することはできなかったが、外観写真を見ると、切妻屋根の妻面が荒石貼りであり、また、外壁の隅部にはコーナーストーンのような荒石の装飾が施されている（写真 9）。こうして見てくると、三上貞の手になる旧日本人青島中学校校舎ならびに旧寄宿舎は、旧ドイツ総督官邸をモデルとしたものと推測できる。ただ、こうしたモデルがあったことからオリジナル性は欠けるものの、三上貞の残した旧日本人青島中学校ならびに旧寄宿舎は、日本国内にはほとんど見ることのできない極めてユニークな建築といえる。いずれにせよ、当時、ドイツに渡ることなく、船で近くの中国の青島に来るとドイツの世紀末建築を体感することができたのである（図 2）。

## むすびにかえて

現在、青島を訪れると、整然と整えられた街並みや白い外壁の建物で、低層はもちろんのこと高層建築にまで見られる赤瓦屋根を持つ統一感ある風景に目を見張るだろう。そして、同時にこうした共通した建築要素こそ、1898-1914 年のドイツ時代につくられた建築をベースにしたもので、初期の建築様式が現代都市の景観にまで深くかかわっていることに気づく。それほどまで、ドイツの支配下の中で生まれた建築は地元の人々に受け入れられていたのである。そのひとつの理由は、この時代の建築こそユーゲントシュテールという新様式であり、かつそこに地元の特産である石を取り入れたユニークな表現を用いた建築を生み出したことにあるように思われる。

こうした青島のドイツ建築は、日本にどのような影響を与えたのか、1914 年から 1922 年までの第一次日本時代に青島を訪れた人々は、青島の建築から何を感じ、また何を学んだのだろうか。今後はそうしたことも振り返る必要があるのではと、今回の視察を通して強く感じた。


1)　村松伸「膠済線が運んだ『青島ゼセエッシオーン』」『アジアの都市と建築』所収　鹿島出版会　1986 年
2)　徐飛鵬・堀口正昭「青島」『全調査東アジア近代の都市と建築』（監修　藤森照信・汪坦）所収　筑摩書房　1996 年
3)　注 1 参照
4)　注 2 参照
5)　冨井正憲「東アジアにおける紡績工場―鐘紡社宅街を中心に―」『年報　非文字資料研究』第 7 号　pp.195-208　2011 年
6)　山口勝治『三井物産技師　平野勇造小伝』西田書店　2011 年